

岩崎 純一 著

『岩崎純一全集』 第三十七卷「社会科学（一の七）」

社会、国民生活（三）

労働、納税、社会保障、労働災害、ハラスメント、過労死・自殺

編纂、監修

岩崎純一学術研究所『岩崎純一全集』編纂局

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第三十七巻を成し、岩崎の言語の著作物のうち、労働、納税、社会保障、労働災害、ハラスメント、過労死・自殺等に関する述作を収める。

目次

巻頭言

第一編 〇歳～十九歳

第二編 二十歳～二十九歳

第一部 就活よりも生き方が大切だと思ふ

第二部 現代日本社会特有のパラノイア性と鬱病について

第三編 三十歳～三十九歳

第一部 少子化・晩婚化問題や塩村文夏都議へのセクハラ発言について思うこと

第二部 電通の価値観と東大で哲学を学んだ女性の過労自殺

第四編 四十歳～四十九歳

第五編 五十歳～五十九歳

第六編 六十歳～六十九歳

第七編 七十歳以降

第八編 著作者の一部および著作者が岩崎純一であるもの

第九編 著作者が岩崎純一であるもの

第二編 二十歳〜二十九歳

第一部 就活よりも生き方が大切だと思う

二〇一〇年十一月一日 起筆、攔筆、公開

今日も不況・就職難のニュースをテレビで見たが、就活をしている新卒（見込み）の学生たちが、「早く内定をもらえるよう頑張ります」、「将来のため、老後の安定のために、正社員の座を勝ち取りたいと思います」と言っているのを毎日のように見ると、僕も一瞬は、「大人たちと不況が彼らを苦しめているのだ」という同情が生じるのだが、一方で、本当にそれだけかな、とも思う。

よく考えてみると、人間にとつての「将来」、「ゴール地点」とは、「老後」（リタイアした後の人生）ではなくて、「死」である。「安定のために就職せよ」と言う人がいるが、自分の墓場を持って行けないもの（お金など）は、元来、全て不安定である。不安定なものばかりを必死で追い求めることは、親孝行ではないと思う。

人生の中で唯一安定しているもの、親を安心させられる唯一のもの、「自分はこう生きたい、こう死にたい」という心でしかないはずだ。そして、そのことに親子そろって気づいていないケースが非常に多い気がする。

卒業を間近に控えながら、「就職活動が苦しい」と感じ、「正職に

つかずに、のんびりとバイトしたい」、「今は仕事せずに、本でも読みたい」という目標を持つに至った人は、本当は将来や他人のことをよく考えている人だと思う。

普段は、「好きなことばかり言っていないで、就職すべき」という圧迫を周りや社会から受けているから本人が気づかないだけで、実は「生活の安定」という「人生の途中」への投資ではなく、「死」という「人間にとつての究極の将来」に投資する勇気があると私は感じる。

もちろん、最初から「自分はこの会社に勤めたい」という目標があつて夢が叶った人や、苦しいけれども仕方なく現在の職場を選んだ人は、それで構わないと思う。

そもそも、「安定した生活」というものは存在しない。本当は、この世に「定職」というものは無い。普遍的に安定しているのは、「人間は死ぬ」ということだけだ。

どれほどお金があつても、死ぬ瞬間にはその無力さを知り、「自分の人生、これでよかつただろうか」という思いだけが残るはずだ。それでは、とても「安定」のために生きたとは言えない。そんな生き方は、「安定志向」どころか「不安定志向」の生き方であり、むしろ「親不孝」ではないか。

大学在学中から就活（就職活動）に走る今の日本の現状は、「生活の安定」や「親孝行」をスローガンにした、「本当の意味での将来」である「死」からの逃避行動でもあると思う。

逆に、「周りの友人が皆就活を始めているのに、自分だけがその流

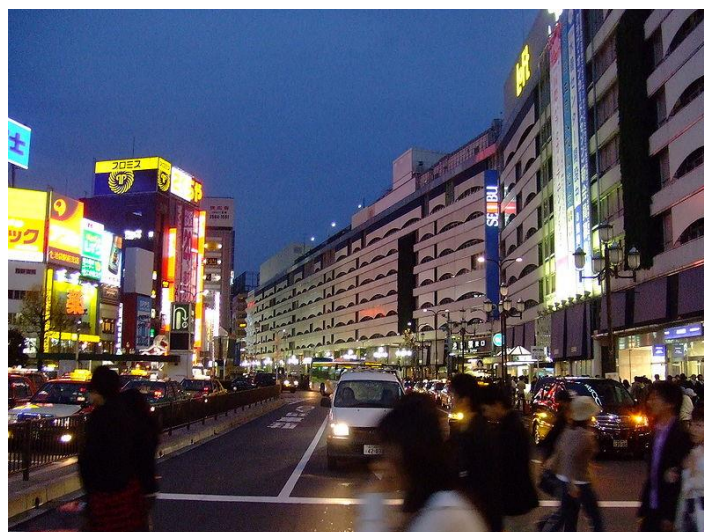
れに乗ることができなくて、苦しい」と感じている人は、就活から逃げていただけであって、将来や人生から逃げているわけではない。そこを、もつと周りの家族や社会が分らないといけないと思う。そして、さらに「就活で自分だけ出遅れたのかな。でも、自分は就活よりも、こういう生き方がしたい」という思いにまで至った人は、実はエゴイズムとは程遠い人であり、同時に、自分の将来すなわち「人間はいつか死ぬ」という事実を、最も真剣に見据えている人でもあると思う。

これに対抗する価値観が、盛んに言われる「即戦力」というものだと思う。もちろん、元は軍事用語である。今すぐに「戦績」を叩き出せる力（しかも、自分が生きる力ではなく、自分が勤める営利企業を生き残らせる力）は、遠く自分の死や命と真剣に向き合うような、深みのある力とは対極にあると思う。

僕は個人的には、たとえ就活に乗り遅れていても、即戦力が無くても、お金が無くても、深みのある人とは交流していきたい。なぜなら、そういう人くらい、安定した人、見ていて安心できる人、将来が保証された人はいないと思うからだ。

第二部 現代日本社会特有のパラノイア性と鬱病について

二〇一一年八月二十六日 起筆、摺筆、公開



今回は、あまり私らしくない記事を書いてみる。意見が私らしくないのでなく、扱う話題が私のサイトにしては珍しい、という程度の意味だけでも。

東日本大震災が起きて以降、私はこのブログで「震災と一部の日本人の心（特に鬱）」との関係について色々述べてきた。「震災が起き、絶望的・廃墟的な光景が東日本に現出され、生活格差がリセットされたことが、いわゆる鬱病患者や鬱状態の人の症状を軽減さ

せた」と見て、「日本的な鬱」の存在を好意的・肯定的にとらえるのが、私の思いであると言える。

普段は心を消耗して生きてきた代わりに、いざと言う時にそれだけ「実利的な」意味で失うものが少なかつた人間は、心が楽になれたのだと思う。逆に、津波にさらわれた富が余りに大きかつた人間の絶望ほど、確かに計り知れないのだろう。

その一方で、これとは異なる立場からの論調もなるべく見るようにしてきた。すなわち、震災などの災害が起こってやっとな外出できる気持ちになれる鬱病者やニートやひきこもりを、多かれ少なかれ批判する立場の人たちの意見のことである。特に、自身のブログを持つ地方自治体の長などが、実際にこの問題について持論を展開していたのが興味深かつた。

中には、「放射線問題で騒いでいるのは、今までニートなどと言われていた社会不適応者である」との持論をブログで展開した自治体の長が複数人いて、ネット上では一時期問題となつたが、これは、一連のブログ記事が、ニート非難というよりは、放射線被害を不安視する市民への暴言ともとれる文章展開であつたことから、批判を浴びたようである。

また、何人かの精神科医も、「原発事故に興味を持っている人には、鬱病者やニートやひきこもりが多い」という見解を述べており、その主張にはやはり賛否両論あるようである。

ここで私が言つてみたいのは、「そのような自治体の長や精神科医たちの見解への私の不満」というよりも、「少なくとも現代日本社会

の姿と日本人の鬱の増加との間に一定の関係性があることは、案外、社会の上層の人たちも分かつていることへの私の興味」のほうである。両者に相関関係があることに薄々気づいている日本人は、実はかなりいて、そこから先の「物事の見方」が皆で互いに違う、と言つた方がよいのだと感じた。

すなわち、私ならば、「大震災が起きて鬱症状が軽減された鬱病者の気持ちが好きに理解できる」という心理に傾斜するのであるし、そうでない人々ならば、「普段の社会生活で鬱病を発症しておきながら、震災が起こったときにだけ外に出てくる一部の人たちは、やはり社会不適応者である」という心理に傾斜する、と言えるのだと思う。

さて、何も専門の精神病理学者でなくとも、こうして今の自治体の長も、あるいは会社役員・会社員も、一般の主婦・母親なども、テレビやネットで「社会不適応」という言葉を当たり前のようについている現状があるわけだけでも、そもそも「社会（社会人）」という言葉をもう少し丁寧に見ておきたいと思う。

私の場合、「社会人」の中に、公務員がいたり会社員がいたり学生がいたり主婦がいたり鬱病の無職者がいたり子供がいたりするだけだ、などと、極端に無作為的にとらえるわけだが、この私の「社会」解釈は、江戸時代までの「世間（せけん）」や「浮世（うきよ）」の用語概念に近いと言える。

江戸時代には、人口の三割から四割が今で言う無職・ニートであつた都市が多数あつたが、これは今の「職業」が「収益・対価・報

酬としての金銭を得る目的」を内包しているからで、江戸時代一般には、直接に金銭を得ないで放浪の旅や深い思索生活をすることも「なりはひ（生業）」や「天職」たり得た。また、「なりはひ」とは、元々は「農作業」のみを指した。

元々「世間」とは、「人間・動植物・山河をも含めた全ての存在」を意味する仏教用語であり、これがヤマトコトバであった「浮世」の対応語と見なされたが、明治時代に入って、日本の上層の知識人たちが「Society」を翻訳しようと試みたとき、この単語が意味する概念が日本人及び日本に存在しないことに頭を抱えて、これを「社会」と名付けた。

初代文部大臣の森有礼や幕臣の福地源一郎らがその「難解な知的作業」の担い手であり、自身らの著書に初めて「社会」の語を登場させるに至った。

ただし、この時点での「社会」は、「人間とそれ以外の生物との差異」のみを重視したにすぎず、「金銭の授受や社会契約や文法言語の概念を脳で認識できる生物としての人間が独自に有する、他の動植物に対するテリトリー」という程度の意味でしか読み取ることができない。

（それまでも「社会」という漢語はあったが、この「社会」とは、今で言う「結社・教団・教派」に近く、「社」よりも「会」の音を高く発音する単語で、今の「社会」とは無関係の語であることに注意。）

森有礼や福地源一郎とて、今の我々が用いている「社会（社会人）」の概念を自我において認識できたかどうかは疑わしく、また文献か

らもそのことが確認できない。すなわち、「ある一定以上の陰鬱な気分を持つ少数人間の集団を鬱病者や社会不適応者と呼び、それ以外のいわゆる社会適応者・健常者の集まり」を「社会（社会人）」と呼ぶ今の我々の常識的な感覚は、文明開化の当時とて一般日本人には理解不能であった可能性があるようだ。

では、そのような昨今の「社会（社会人）」の定義とはどのようなものかを、もっと丁寧に考えてみよう。

私のサイトは、主に社会的少数者の感性や心を扱っているから、しばしば鬱病や社交不安障害や適応障害や回避性人格障害や対人恐怖症の方々がご訪問下さり、今やこれらの話題が私の勉強会の主軸を成しているが、その中に「会社員・サラリーマン・ホワイトカラーにだけは絶対になり（戻り）たくない」と主張する鬱やひきこもりの方々がいる。

最初から社会を敵視して「働くことが馬鹿らしい」と言っている人の場合は、私のサイトとは趣旨がずれるのだろうし、そのような方は知人にはあまりいらっしやらないが、自分の頭の中で論理的・有機的な社会批判を持った上で「働くことがよいことだとは思えない」という「就業への疑念」に達していると思われる人の場合は、私は大いに見る価値や意義があると思って、色々とお話を伺うなどしている。

私は一応、法人運営にそれなりに携わっていることもあって、自分の造語として「会社妄想社会」（カンパニー・パラノイア・ソサイエティ）という語を考え、今の日本社会と上記の鬱病などとの関係

を丁寧に考える道を模索してみている。この造語は、日本語ではないかにも物騒に「偏執病」や「妄想症」と訳される精神疾患である。「パラノイア」を借用して作ってみたものなので、あまり独自性があるとは言えないけれども。

私の言う「会社妄想社会」というのは、簡単に言うと、「法人の形態に会社があるのではなく、法人という概念がすでに社会的である社会」、あるいは「社会的性格の個人のことを社会人（成人）と呼ぶ社会」のことを指す。

誰のせいだというわけでもなく、かつ自分自身でも気づいていない状態で、すでに少なからぬ我々日本国民の脳にこの観念があると仮定すると、「社会不適応者」という言葉が、精神病理の非専門家であるはずの自治体の長や会社役員やテレビ関係者や一般主婦の口について出る現状の不思議さが説明できそうだからだ。

言い換えると、会社が社会的に経営されるのは当たり前だが、独立行政法人も学校法人も公益法人も社会福祉法人も、さらには個人の心・命・脳までもが、社会的に運営・運用されなければ生きていけない社会のことを、そう呼んでみた。

また、精神病理としての「偏執病」「妄想症」診断には、「妄想の内容を正しいと信じていながらも、それ以外の日常行動・人間関係には異常が見られないこと」という主旨の条件を満たす必要があり、いわゆる今の我々日本人自身がこの条件に合うと見なせば、そのような社会の一つの「会社偏執社会」であると見る見方があっておかしくはないと判断してみたわけである。

ここで、「我々人間（自然人）」と「法人」の定義について見ておきたい。会社も法人の一種である。理論上は、法人形態は数十・数百と設けることができ、そのうちの一種（旧商法下における営利社団法人性を保持しつつゴーイングコンサーンを有する企業）が現在の「会社」である。

法人とは、「法的に人格を付与された、人間や財産の結合体」のことである。恋愛や結婚のように、自然人にだけできて法人にできないこともある。それ以外の権利能力（営利追求など）は法人にも同様に認められる。自然人個人としての会社員の営利追求は、「給料を上げてほしい」という欲求として現れるが、これは結局は、会社の経営状態に左右される。

商法単独の時代には、「会社」は、「営利性」「社団性」「法人性」の三つの性格がかなり明白で、条文にこれが明記されていた。すなわち、「会社」とは「営利社団法人」とほぼ同義で、論理演算における否定論理和（つまり「反対言葉」）は「非営利財団非法人」である。

ただし、実際にはこのような形態はとられない。「非営利財団非法人」には、いわば「不特定多数の人のために自分の財布を捧げる仙人の財産」くらいしかないことになる。商法上の「会社」とは、その「仙人的人格」の否定論理和であると思えばよいわけである。

つまり、「特定の人（株主など）のために利益を分配することを目的として営利活動をおこなう、法人格を有する人間の集団」として「あえて」作られたのが「会社」であり、このような集団は、人間（ここでは日本人）の脳が認識しうる「人間や財産の集合体」のうち

ちの一形態にすぎなかった。

それが、現行の会社法を見てみると、「会社の定義」自体が自己言及的になっている。会社法第一編第一章第二項において、「会社」とは、「株式会社、合名会社、合資会社又は合同会社をいう」と定義されているが、「会社の説明に会社という用語を使う」論理、つまり、「会社とは我輩のことである」という言い方であり、この自己言及は、現憲法にも見られる。

現憲法第九十八条には、「この憲法は国の最高法規」である、すなわち「我輩は最高法規である」と「自分で」書いてある。いずれにせよ、この憲法のもとで施行された会社法のもとで、会社は存在している。

帝国憲法の時代なら、北一輝のように、天皇大権によって憲法を停止するという奇策も考え得たわけであるが、その意味で現憲法は、本当はそれよりもっと排他的な（他の法令に自身の最高法規性を否定させない）論理構造を持っていると言える。

私の仮定する「会社妄想」が最も端的に表れている例がある。いわゆる結婚斡旋サイトなどの「職業選択欄」を見ると、「会社員、公務員、自営、無職・・・」などとなっている。会社員が、法律上の社員（会社法人の構成員）ではなく、従業員であることを考えると、「会社員」の分類を設けるなら、「社団法人職員」「財団法人職員」「学校法人職員」などを同等に列挙するのが理にかなった方法だ。

昨今の結婚斡旋サイトの職業分類は、もしかしたら、自分の（または娘や息子の）結婚相手が「会社員であること」についての安心

感という、我々の一種の「パラノイア」から来ているかもしれない。いまだに「会社員」のイメージがバブル景気時代のまま残存していることを物語っているように感じられるからである。

昔は、「会社員」という言い方に加えて、「サラリーマン」や「ホワイトカラー」という言い方も一般的だったが、そこには「明るく社交的で、仕事をしたあとは仲間とアルコール類を飲み、一人の妻と二人の子どもを持つ、将来性のある男性」という響きが含まれるように思う。

ちなみに、海外の結婚斡旋サイトなどでは、「会社員」も、「法人構成員（社員）」ではなく、「従業員」としていわゆる「団体職員」にくくられている例がある。本当は日本においても、この方法が最も理にかなった職業分類だと言える。

また、ここで言う「会社」とは、ほぼ株式会社を指していると言ってよいと思う。例えば、これまでは、ほぼ全てが公益法人であった社団（財団）法人は、全てが近年のうちに公益社団（財団）法人と一般社団（財団）法人とに分離されるが、実質は、一般法人はほとんど株式会社と同じく営利的発想で運営しなければ維持できないようになっていく。

この改革は、社団法人における社員（財団法人における評議員）を株式会社における株主、社団（財団）法人における理事を取締役と見なして、さらには予算・決算の処理方式も株式会社方式に変更し、ほとんど株式会社の経営を公益法人に要求するものであると言える。

また、有限会社も、名称だけは一部残るものの、実質的には株式会社の下位分類扱いとなっていく。さらには、複数の有名大学のよりに、大学がホテルなどを経営することも普通になっていくであろう。

今や、「法人」の一部に「会社」があるのではなく、「法人」とは必ず「会社」である。これが、僭越ながら私が指摘してみたい「会社妄想社会」の姿と言えろ。実際に、株式会社に向向した公益法人もあるが、転向せずとも、独立行政法人、学校法人、公益法人、社会福祉法人などの各法人は、「会社」発想をスムーズに遂行できる人材を役員に置いた法人が、生き残る時代になっていくのであろう。先の東京都知事選でも、外食産業や介護事業を展開している企業の創業者である候補者が、「都政にも会社の経営感覚が必要である」と主張して立候補したのは記憶に新しい。

「会社の経営」に「公務的な」発想を入れるのではなく、「公務」に「会社の経営的な」発想を入れるという方向性である。もし都政を会社風に運営しなかったとして、本当に将来的に都政が弱体化したら困るものだから、もはや賛成か反対かという問題でもないかもしれない。

ところが、「会社の経営感覚」とは何ですか、という問いには、おそらく誰も答えられない。法律自体が自己言及しているから、法律も答えられない。「営利を上手に追求する経営感覚」というのは、実は答えになっていない。

「日本の国や自治体が公務員や会社役員に、公務員や会社役員が従

業員に求める何らかの性格」、「両親が将来を見据えて子どもに勉強しなさいと叱るときに認識している一定の実利的パラノイア」、「鬱病を患っていない、会社にとって有益な人間として認められる人間」・・・それを「会社」的」と言うのである、とする以外に定義のすべがないわけだ。

これは法人と個人だけでなく、個人どうしの関係でも言えることで、特に子どもや鬱状態の学生を見ていて、気の毒になることがある。ある学生たちは、次のように私にメールしてきた。

会社員になるのに「会社員の座の争奪戦（就職活動）」に勝利すること」が必要であるのは序の口で、友人を作るにも「友人市場で勝利すること」、恋人を作るにも「恋人市場で勝利すること」、合コンで勝利するにも「合コン市場で勝利すること」、親に好かれるのにも「兄弟に勝利すること」、親が息子のクラスメイトの親たちに勝利するにも「息子を学校や塾で勝利する子に育てること」が必要になってくる、と。

確かに、市場というのは、結局は「需給関係」を基軸に成り立っているのだから、「親の愛が欲しい」と需要を訴える子どもが、「親の愛」という供給を得ようと思つたら、「対価」すなわち「高得点のテスト」を親に捧げないといけない、という具合である。（しかし、本当の親子関係はそういうものではない、と私は思っているのであるが。）

いずれにしても、このような損得判定能力、すなわち「自分に値段を付ける能力」をなるべく幼少の早期から子どもに身に付けさせ

ることは、確かに、十数年後にその子どもが会社の面接試験において円滑な自己主張を披露するための近道であるかもしれない。あるいは、国も自治体も会社も親も、そのような人間を良き「社会人」と認識しているのだろうかと思う。

すなわち、誰にも答えられない「社会的なる何か」が、いつのまにか「法人」だけでなく「自然人」にも適用されているわけだ。

結局のところ、このような現日本社会で取り残されていくのは、どんなに努力しても営利的・実利的思考ができない性格の人間、特に「自分に値段を付ける」とか「自分を売り込む」といった作業が不得手な性格の人間であると私は思う。

それが男性である場合には特に、一気に「自分は家族を養う能力がなく、価値のない人間である」という自己否定に結びついている気がする。これが、「日本においては、男性の自殺者数は女性の2倍いる」という現実として現れているのではなからうか。ところが、ここで言う「価値」とは、「いわゆる鬱病にかかっていない社会人側が作った価値」のことであって、「人間の命の価値」ではない、と私は思うわけだけでも。

ところで、私が某大学で「共感覚論」の講演や授業をしたとき、前もって司会の教授から、「途中で就職活動で抜ける学生がいますが、気にしないで進めて下さい」と言われ、大学の存在意義について大いに考えさせられた。最後まで残った学生に、「大学の講義と、就職活動と、どちらが大切ですか」と聞いたら、皆、申し訳なさそうに「就職活動が大切です」と苦笑して答えたのが印象に残った。

「社会人」「成人」という単語（もつと言えば「人間」という単語）のうちですでに「社会的性格・営利的体質の持ち主であること」が内包されているような「会社妄想社会」は、今後どうしても広がりを見せていくのだと思う。

ただし、いわゆる「社会人（社会適応者）」の定義から外されている「社会不適応者」たちが現に存在し、大切な課題を日本全体に投げかけている以上、国民の全員が「パラノイア」に罹患することはないと見て、身勝手ながら安心したくなってしまう。

日本の鬱病者を減らしていくには、今の「社会人社会」のほうに鬱病者を引っ張り上げてうまく適用させる「支援」をするという発想では良くないだろう、というのが前々からの私の意見である。「人間は誰でも鬱になる可能性を秘めているのだ」という考えを持って、「支援・被支援の二極関係」を薄めていく作業が、大切ではないだろうか。

国の運営からして、私は「政治主導」をあまりに言いすぎるのもよくないと思っている。政治「主導」ではなく、「共導」が大切なのではないか。

非会社・非営利法人においても、立法的権限を有する法律上の社員や評議員の地位をいたずらに高めることよりも、行政・業務執行権限を有する理事・役員にそれなりの負荷をかけて運営に責任を持たせる手もあると思う。

「日本型儒教」的な年功序列制によって、むしろ会社役員に大きな権限を与えて負荷をかけ、会社経営に専念させる代わりに、やがて

その会社の従業員となる学生たちには、国と教官陣と会社経営陣が協力して、少なくとも大学在学中は、いわば「就職活動禁止令」を出し、きちんと人間としての学問と教養と品性を身に付けさせてから送り出す、という社会でもよいように思われる。

私の母校である東京大学がそのような社会を提案・牽引してくれないかと期待している。

しかし、今のところは、「日本」という新幹線は、ちょうど一八〇度正反対のレールを走っているように思えてならず、高卒で就職するわけではない（大学を出てから就職するつもりである）のに高校生あたりからその就職活動が始められる時代が、いずれ来るかもしれない。こうしてまた、そこから取り残され、親と「社会」に申し訳ないと罪悪感を感じた鬱病者が疎外されていく状況が生まれていくと思う。

■画像出典

http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Ikebukuro_Station.jpg

第三編 三十歳〜三十九歳

第一部 少子化・晩婚化問題や塩村文夏都議へのセクハラ発言について思うこと

二〇一四年六月二十三日 起筆、攔筆、公開

●内閣府・厚労省の少子化・未婚化・晩婚化調査結果

ここ数日は、各メディアもネット上も、都議会での少子化・晩婚化問題についての塩村文夏（あやか）都議の質問時に飛んだセクハラヤジの「犯人」探しの話題で持ちきりのようです。

グッドタイミングなのかバッドタイミングなのかは分かりませんが、皮肉にも先日、今年の「少子化社会対策白書」が閣議決定されました。未婚・晩婚化の理由として最多だったのが、男性では「経済的余裕がないため」（52%）、女性では「独身の自由さや気楽さを失いたくないから」（55%）でした。

重要なのは、未婚の若者に未婚の理由を尋ねたのではなく、あらゆる年齢層の男女に「なぜ未婚が増え、晩婚化していると思うか」を訪ねた結果だという点です。

この他、女性のほうが極端に多い回答に、「希望の条件を満たす相手にめぐり会わないから」、「仕事（または学業）に打ち込みたいから」があります。男性では、「異性とうまくつき合えないから」が高くなっています。

結局まとめると、「男性に対して希望する条件が高く、自分は仕事や学業に打ち込んで自由と気楽さを楽しみたいという女性とは、男

性はうまくつき合えていないから、結婚にまで至らない」という当たり前のことしか言っていない気はしますが、色々と重大な問題を孕んでいるので、冷静に細かく分析してみましよう。

よくよく白書を見てみると、ヘンだとしても言いようがないと思います。単に「結婚の意志・希望の有無にかかわらず」未婚である理由」を尋ねているのに、多くの国民が「男性が結婚したくてもできない理由」と「女性が結婚したくない理由」を答えている点が、です。

ところが、多くの国民が、人口動態調査でも自殺対策白書でも同じ答え方をしています。だから、もはや国民の思考回路がそうなっているとしたか考えられないように思えます。「男と女は永遠に分かり合えない」といったオシヤレな詩的表現とは意味が違って、重大な社会問題だと思えます。

この調査結果は、自分が自分をそう思っているというより、国民の目に世の男性・女性がどのように映っているか、異性から自分などのように思われていると感じるか、という観点で見るとべきものだということになります。

国民それぞれの目には、男性に経済的余裕や女性との交際の自信がなく結婚をためらっているように見えているし、女性が男性に高い条件を要求して自由と気楽さを謳歌しているように見えている、ということを通じてしなないと意味がないと思うのです。

あるいは、これらの回答は、未婚の人たちが過去に実際に異性から言われたか、異性から日々要求されている（と感じている）ため

に将来の婚約者や結婚相手からも当然要求されるだろうと予期している内容でもあるのだと思えます。

こんな国で、簡単に少子化・晩婚化が止まるとは考えがたいです。特定の政党・政府がコントロールできるようなものではないと思います。

本日はこういう白書と同時に、「男性では正規労働者よりも非正規労働者の生涯未婚率が高いが、女性ではほとんど差が出ていない」、「女性の自殺の理由は、性犯罪被害や虐待被害などが多い」、「男性の二十代〜四十代の死因のトップは自殺である」、「男性では五十歳までに結婚経験がない場合、その後も独身である確率がほぼ100%である」といったデータをマスメディアが出せば、即座にその奥にある真相が見えてくるものです。しかし、こういう部分だけは、国や民間調査団体は公開しているものの、マスメディアは隠すことが多いです。

「経済的余裕のある男性や、仕事と子育てが両立できる職場や保育所に巡り会えないから（でも、それを男性だけのせいだとは思っておらず、政治のせいだと分かっている）」や「親が反対しているから」というのが「結婚したくてもできない」多くの女性の意見なのであって、自分の自由と利益を優先するために「結婚したくない」と意見や行動をするような女性に対しては、女性の間でも批判が起きるはずだと思えます。

●一般の国民・都民女性の日常生活に影響が大きいセクハラに優先的に対応してほしい

さて、もちろん、今回都議会で発せられたようなセクハラ発言も大いに問題だとは思いますが、もっと一般の女性が無差別に被害を受けているケースを、国や各自治体の議会でどんどん制裁的に取り上げてほしいです。

以前、池袋駅前で出くわした光景ですが、とある献血団体(NPO)のメンバーが駅前で献血を呼び掛けているかと思ったら、横断歩道で信号待ちをしている私の数メートル前で、同じく信号待ちしている一人歩きの若い女性を男性メンバー数人で取り囲み、「献血いかがですか?」と詰問していました。女性が「いいです(断る意味で)」と答えたなら、一人の男性メンバーが「ちえっ。ダメだってよ」とリーダー格らしき男性に報告しました。すると、そのリーダー格が近寄ってきて「血ぐらいくれてもいいでしょ」と女性を脅迫しました。それでもダメなら、今度は若い女性が出てきて、「あなたのためを思っただけでオススメしているのよ」と同性間のハラスメントとも言える言動に至りました。

そういう光景に、池袋と巣鴨で何度か遭遇しました。これも結局、「血」の問題でも何でもなくて、「性」を利用したマインドコントロールや悪徳ビジネスだろうと思います。しかも悪いことに、元気に友だちと騒ぎながら歩いている女性には声をかけず、一人で静かに歩いている女性ばかりに声をかけるのが、見ていて腹が立ちます。

こういう時は、通りすがりの者にできることと言ったら、変な団体と被害者の間に割って入って、仁王立ちして信号待ちをする、そしてすぐに交番に駆け込むか通報する、ということくらいなのがじれったいんです。相手は複数の男性ですので、男性一人が正義感だけで手を出したところで、結果は見えています。

幸い、取り囲んだ状態で女性の腕をつかんでスタモンダしているところでも、だいたい信号が青に変わるので、今のところ事なきを得ていますが、「実害が出ていないし、現行犯でもないし、献血を勧める時の声のトーンが本当に脅迫的かどうか不明」ということで警察も全然動いてくれないですし、最近流行の冤罪事件のように「本当は君がやったんだろ?」などと疑われてもいけないので、どうしようもないです。区や都に言うのが一番なのでしょう。軽微な条例違反どころではないと思います。

一人の人間としては、「そういう光景にたまたま出くわした人は、警察の代わりに加害者を殴り倒してもよい」というくらいの条例でも作ってほしい気分になります。

いずれにせよ、このような例は、献血だけに「ブラッディー・bloody・ハラスメント」、略して「ブラハラ」と言っただけでいいと思います。「血」とは、文字通り「血液」の意味でもありますが、女性の「性」が血と骨の隅々に至るまでビジネスに使える世の中になっていることの英語的な形容としても、そう書きました。よ、bloodyには、ひどい、度が過ぎた、残酷な、意味がありますから。）

男性だけでなく、女性自身がそう思っている(女性の性が使える

と（思っている）場合があるということを、塩村都議に限らず、政治家・官僚が分かっているか分らない現状だと思います。いや、それ以上に性犯罪だし、脅迫罪・強要罪、場合によっては傷害罪になりうるものだと思います。

今現在は、明らかに脅迫・強要を伴う献血の勧誘であっても、罪刑法定主義の観点からは、女性の生命・身体などを害悪する告知とまでは見なされないようで、実際に警察の間でも軽微な条例違反という認識にとどまっているようです。

しかし、実際は大人しい女性ばかりを意図的に狙っているわけですし、日本人の男女両性が主導するこのような女性侮辱団体がある現実を直視しなければならぬと思います。

社民党やフェミニズム団体も、あまり「女性の権利」を全称的に掲げるより前に、もっとそのあたりのことを注視してほしいです。女性を利用する女性から被害女性を守ることも同時に考えなければ駄目だと思います。

基本的に私は、個人的な考えではありませんが、同じ献血や被災地支援の募金活動やフェミニズムの演説と言っても、街頭でやっているものはほとんどが怪しいし不衛生な団体であると思っていて、それはさすがに思い込みすぎかと反省していたのですが、本当に怪しい団体が多すぎます。

献血したところで、世界のどこかの困っている子供たちの体内に本当に入るか分かったものではありませんし、「被災地のワンちゃん、ネコちゃんに募金を」と言われて募金したところで、本当にワンち

ゃん、ネコちゃんの口に入るエサになるか分かったものではありません。

どれだけの善意が怪しい新宗教団体やNPO法人や暴力団の資金源になっているか分かりません。特に東京はそういう所なのですから、都議会・区議会・警視庁で徹底追及してもらいたいです。また、街頭でのそういう誘いに乗る一般国民の安易さは、決して善意ではないし、知性や良識や衛生観念の欠落であると思われるのも仕方ないと思います。

●塩村文夏都議の質問時に飛んだセクハラ発言

さて、今回の都議会でのヤジですが、本日、鈴木章浩都議が一部の発言は自分のものだと謝罪しました。まだ他にもいるようで、ネットユーザーによる「犯人」探しは続くのでしょうか。その場にいた自民党の都議たちには、すでに分かっているでしょうか。

その場では塩村都議個人に対して発せられた言葉ではありませんが、立场上、都民女性・国民女性全員に向けて発せられた言葉であるところからしても仕方がないですし、そもそもどうしてヤジが禁止されていけないのか不思議に思います。会議で他の人の発言中に口を挟むこと自体が問題だと思ってしまう。

「品位の問題」として処分すべきという意見もあるようですが、そんなことをし始めたなら余計に皆がお互い様で、都議のほとんどがい

なくなってしまうでしょうし、「品位」の話として終わらせるのがおそらく一番不適切ではないかと思っております。

それに、内容について言い合うと収まらないと思いますし（すでに「男というものは何も分かっていない」などの言葉を用いた、女性議員たちやフェミニズム団体などからの逆襲も始まっていますし）、かえって、まるでお互いのセクハラ侮辱発言W杯のようになって不適切なのではないかと思しますので、ともかく「人が話をしてる時には口を挟まない」ということを徹底していただきたいです。

本当なら都民・国民女性のバランス感覚で、都民の生活の蚊帳の外で行われた同点ゴール（どっちもどっち）として片づけるのが、最も冷静で客観的な視点だと思えますし、それが「品位」なのだと思います。

ただし、基本的に今回は、どっちもどっちではなく、塩村都議と都民女性・国民女性が被害者として収束するのが筋なのかもしれませんが、しかし、そうしたければしたいほど、「品位の有無」を除いて、本当に異性間の感情論ではなく、立场上や会議の礼儀上の問題として片づけるのが、良い気がしています。

それにしても、私は個人的には、未婚の女性に苦言を呈する世の女性たちの心境に、普段から大変関心があります。女性間の格差もまた激しいのだと、いつも傍目に見ていて感じます。こういった苦言が、未婚・晩婚・不妊などに悩んでいる都民・国民女性を傷つけている可能性も多々あるのではないかと、非常に強い不安を感じます。

【参考文献】（内閣府のサイトのファイルは移動が頻繁にあるようですので、サイト内検索で同タイトルのものを探して下さい。）

少子化社会対策白書

<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/whitepaper/measure/index-w.html>

犯罪被害者白書

<http://www8.cao.go.jp/hanzai/kohyo/whitepaper/whitepaper.html>

自殺対策白書

<http://www8.cao.go.jp/jisatsutaisaku/whitepaper/w-2014/pdf/gaiyou/index.html>

自殺の統計

<http://www8.cao.go.jp/jisatsutaisaku/toukei/index.html>

男女共同参画白書

http://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/index.html

第二部 電通の価値観と東大で哲学を学んだ女性の過労自殺

二〇一六年十二月十日 起筆、擱筆、公開



先月七日（今から書く内容に似た、別の場への提出原稿を書き始めた日）、テレビでは、電通の女性社員（高橋まつりさん）の過労自殺をめぐって東京労働局が同社の強制捜査に入ったニュースが流れていた。ここ最近、疲労で発熱や頭痛に苦しめられていた私だが、この女性に比べれば実に大したことのないものに見える。やや気力が戻った先月22日は、福島県沖での地震で津波が発生し、日本中が東日本大震災を思い出したが、死者が出なかったことに皆安堵している。

個人の「生」や「命」が現代日本という文脈においていかにあるべきか（あることができるか）について、私は常々考えているが、

とりわけ東京大学で哲学を学んだ冒頭の後輩女性の自殺には、いつもと違うものが感じられ、心を痛めた。東大の哲学・文学・教養系の後輩男性の自殺は定期的に起きていたが、女性のこのような自殺は久々に目にした。後輩と言っても、私は早々に同大中退の上、日本庭園や神社仏閣への鬱々とした放浪の旅を経てしぶとく生き残っているのに対し、死の直前まで男性上司らへの不満を、Twitterという新時代のツール上に書く気概を見せたこの女性のほうが亡くなった事実には、どうしても驚愕せざるを得ない。

東大哲学を捨てた私が生き残り、東大哲学を完遂した者ばかりが世に知られず自殺している現状を見ると、どうやら東大哲学は私の知らないところで死の方法を教えているのではないかという疑念が生じるが、もちろんそんなことはない。ただし、東大卒・出版社勤務だった鶴見済が『完全自殺マニュアル』を著し、社会現象を巻き起こしたように、東大哲学・社会学学関は、表でも裏でも日本人の死生観をコントロールしてきたのだから、そのルールを早々に降りた者として、私も今回の過労自殺について思いを巡らせておきたい。ともかくにも分かることは、「この女性にとっては、電通（日本の大企業）の価値観よりは東大哲学が安住の地だった」ことである。ここまでは、この女性と私とで極めて価値観が似ている。

日本では、自殺者は男性のほうが女性の2.5倍〜3倍くらい多いが、自殺の動機としては、経済的理由、病気の苦痛、家庭問題以外に、今でも哲学的自殺と呼べるようなものが含まれている。哲学的自殺に含まれると思われる東大の哲学・文学・教養系（自然科学系も少

しあり）の男性の死はいくつか見てきた。特に、これらの分野の中退男性は自殺率が高く、その頭脳の消失が国益の損失や科学発展の鈍化に直結するからか、厚労省や日本中退予防研究所などの調査対象に入っており、怪しい書面が送られてきた当事者である私の実感からすれば、東大中退男性のリストがNPO法人間で不当に売り買いされているような気がするのだが、ともかく、今回のような女性の自殺は痛恨の極みである。

ところで最近、宮沢賢治の作品を読んでいるが、彼の「失うものがない自由人」としての書きぶりに、非常に気分爽快になることがある。例えば、賢治作品には、人間や動物の大声を聞いて耳が「つんぼ」になったとか、人間や動物を「きちがひ（きちがい）」になるまでいじめたといった表現が出てくる。読むときに、いわゆる丁寧な言葉遣いをして本質をごまかす「いい子」でなければならぬこととはないし、賢治自身が「いい子」を気取っていないところに、賢治作品の真の魔術的・悪魔的・神的価値があるのである。

今は時代も変わり、精神障害分類も用語も（科学的根拠はありつつも「いい子」風に）改訂され、せつかく宮沢賢治が用いた「つんぼ」や「きちがひ」はもちろん、およそ二十年前までの日本の精神科医らが用いた「分裂病」や「躁鬱病」、「鬱病」、「癲癩（てんかん。現在とは定義も分類も異なる）」といった用語を使うことさえ難しい時代となった。

だから、冒頭の女性のような過労死・過労自殺についても、わざわざブラック企業やブラック上司の言動によって従業員が「PTSD

（心的外傷後ストレス障害）や聴覚障害になり、労災認定された」とか、「死の直前には、彼（彼女）のSNSに鬱的傾向を示す言葉が綴られていた」などと軽々しく（被害が軽かったように）書かざるを得ない。

本心をさらけ出して、「ブラック企業やブラック上司の言うことなんか聞きたくないので、私は今からつんぼになります」、「きちがいであるあなたのパワハラのおかげでこっちがきちがいになりそうなので、今日をもってこの職場を辞めます」などと、素直で気分爽快な宮沢賢治的言動や発狂をしようものなら、したほうが頭がおかしいと思われるに決まっているのである。

今や、現実に労災、PTSD、気分障害、不安障害、パワハラなど（の現代精神病理学的な枠組）に苦しみ異様な労働人生や自殺前夜を過ごす若者を前にして、賢治童話や賢治的労働社会の理想郷、そして学問・芸術一般はどうあればよいのかを、論じなければならぬ時代になった。私の労働観や理想郷観も、人間学・精神病理学・社会学寄りのものにはなっていくのだろう。

先の過労自殺女性が遺した文章から読み取るに、東大で哲学を学んだこの女性は、鋭い哲学的直観によって日本社会の欺瞞に気づき、Twitterで男性上司への不満を綴るといった反抗まではやってみたものの、最終的に宮沢賢治のような包容力を持った（母親と数名の友人以外の）人間に、この世で出会ったことはなかった。その意味では、この女性は宮沢賢治の感覚を孤独の中で体感していたと思う。

この女性に企業と上司が要求したものは、「女子力」や「即戦力」

と名付けられたものであった。そんなカルト宗教的・熱狂的な競争社会に自分は巻き込まれまいという気持ちだけは、この女性にはあったものの、その気持ちは結局、母親と数名の友人を除く身近な人たちからは、社会において持つてはならない誤ったものであると解された。

「人生は極めて楽しくも苦しいものだ」という賢治感覚（例えば、賢治作品に出てくる「つんぼ」感覚、「頭がぐるぐるする」感覚、「まはりが変に見える」感覚、「きちがい」感覚）の苦悩・発狂体験を経てから世に放たれたのではない（そういう直覚体験を怖がって、見て見ぬふりをしている）多くの欺瞞的社會人・企業を前にして、現代日本の文脈のどこかにかろうじて残された賢治的包容力が、この自殺を「優等女性の気の毒な労災」に仕立て上げざるを得なかったとも言える。

私自身も、てんかんや分裂病ではないらしいものの、これまでに参加したどんな知覚・心理関連試験のデータにおいても、明らかな哲学者気質、共感覚、直観像記憶、片頭痛・閃輝暗点（アウラ）の症状を示しており、「まるであの宮沢賢治ですね」などと言われ、重責を伴う労働や煩わしい人間関係を離れて自然観賞や趣味の時間を多分に取るよう言われているが、言われる前からそうしてきたがゆえに生き残っているとも言えるのだろう。

私の場合は、「東大の哲学や表象文化論は自由であり、時代を牽引している」といった言説に疑念を覚え、そこから「東大の哲学学閥や表象文化論学閥から自由になるという生き方が現代において可能

か」という視点の激動（自分の人生における本当の「気づき」体験）を自分の中で起こし、目標を設定することができたために、今のよいうな人生を送っているから、どちらかというと、今回自殺した過労女性よりは、あくまでも自然死に身を任せた宮沢賢治のほうに、生き方が近いとは言える。そもそも、この女性はどうしても「生き方」を見出せなかったから、自ら亡くなったわけである。

換言すれば、私は結局のところ、「東大哲学それ自体が電通的である、という哲学や気づき」を持つている自覚があるのだが、今回の過労自殺女性はTwitterに、「私は電通でこんなに苦しい思いをしている。東大卒だけれど。」という趣旨と論理の主張を書いた一点のみが、私とは唯一異なる価値観なのである。

私の場合は、過労・心労の一手手前で何とか自力で気づいてきた人間で、自宅での沈黙思考や、和歌、日本庭園、神社仏閣、茶、花、雅楽などの興趣に触れることが心の安定手段として確立しているふしがある。これには私自身が驚嘆しているのだが、そういう手段を持たずに労働を続けてきた今回の女性のような、あまりに現代日本社会の言説に対して従順で素直で純粋な人には、現代日本社会（特に大人）の欺瞞を見事に暴くことのできる人間、芸術、趣味に出会って欲しいと願わずにいられない。

私としては今後、従来の西洋哲学でも現在の日本の労働観・社会観でも語れない、自分のテーマである「日本の実存」を軸にした理想の哲学を探求していきたい。

【関連ブログ記事】

●およそ五十の大学と関わってきて思うこと（命名「大学総動員キラ体制」）

<https://iwasakijunichi.net/iwasaki-j-blog/177990948.html>

（二〇一八年七月十二日に追記：現在は『全集』に収録。）

【画像出典】

●電通

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%9B%BB%E9%80%9A>